

滑らかなカラビ・ヤウ多様体の指数

政村 悠登

東京大学大学院数理科学研究科

双有理代数幾何学

代数多様体 $/\mathbb{C}$ を双有理同値で分類したい。

極小モデル理論における予想：任意の代数多様体 Y は、「良い」性質をみたす代数多様体 X と双有理同値。

X の「良い」性質とは、

- ▶ 特異点が扱いやすい（滑らか、ターミナル、など）。
- ▶ 標準因子 K_X が特別な性質を持つ（正值性、負値性、など）。

そのような X の分類

- ▶ X たちの**有界性**
- ▶ X の不変量の有界性、分類

定義 (カラビ・ヤウ多様体)

代数多様体 X が**カラビ・ヤウ**多様体であるとは、 X が正規かつ射影的であり、 $K_X \sim_{\mathbb{Q}} 0$ をみたすこと。

- ▶ カラビ・ヤウ曲線 \iff 楕円曲線。
- ▶ カラビ・ヤウ曲面 \iff K3曲面, アーベル曲面, エンリケス曲面, 双楕円曲面。

定義 (カラビ・ヤウ多様体の指数)

X : カラビ・ヤウ多様体。 X の**指数**とは、

$$\text{index}(X) = \min \{ m \in \mathbb{Z}_{\geq 1} \mid mK_X \sim 0 \}.$$

双有理幾何では、代数多様体 X だけでなく、ログ対 (X, B) を考える (B は X 上の \mathbb{Q} 因子)。

- ▶ (X, B) : カラビ・ヤウ対 $\iff X$: 射影的, $K_X + B \sim_{\mathbb{Q}} 0$ 。
- ▶ $\text{index}(X, B) = \min \{ m \in \mathbb{Z}_{\geq 1} \mid m(K_X + B) \sim 0 \}$ 。

定義

$n \in \mathbb{Z}_{\geq 1}$, $\Phi \subseteq [0, 1] \cap \mathbb{Q}$.

$$l_{\text{kit}}(n, \Phi) = \left\{ \text{index}(X, B) \mid \begin{array}{l} (X, B) : \text{KLT カラビ・ヤウ対} \\ \dim X = n, \text{Coeff}(B) \subseteq \Phi \end{array} \right\}.$$

$l_c(n, \Phi)$ も同様。

- ▶ KLT (川又 log terminal), LC (log canonical) は特異点に関する条件。
- ▶ KLT \implies LC。

予想 (カラビ・ヤウ対の指数予想)

$n \in \mathbb{Z}_{\geq 1}$, $\Phi \subseteq [0, 1] \cap \mathbb{Q}$: 有限集合。このとき、 $l_c(n, \Phi)$ は有界。すなわち、次をみたす $m \in \mathbb{Z}_{\geq 1}$ が存在する： (X, B) が n 次元の LC カラビ・ヤウ対で $\text{Coeff}(B) \subseteq \Phi$ をみたすならば、 $m(K_X + B) \sim 0$ 。

- ▶ [JL21] : 3次元以下 ($n \leq 3$) で正しい。
- ▶ 高次元では未解決。

証明に向けて、次元 n に関する帰納法ステップがいくつか知られている：

定理 ([Xu19])

以下の二つを仮定する：

- ▶ n 次元以下のKLTカラビ・ヤウ多様体 $(X, 0)$ (すなわち $\Phi = \{0\}$) に対する指数予想
- ▶ $n-2$ 次元以下の「B多重標準表現の有界性」
このとき、 n 次元の (一般の Φ に対する) 指数予想が成り立つ。

- ▶ B多重標準表現 : $\text{Bir}(X, B) \longrightarrow \text{Aut}(H^0(X, m(K_X + B)))$ 。
- ▶ B多重表現表現の有界性 : 指数予想よりも強い予想。

さらなる帰納法ステップ

- ▶ KLTカラビ・ヤウ多様体 $(X, 0)$ の指数を、より低次元のカラビ・ヤウ対の指数と関係づけたい。

定義

$$l_{\text{sm}}(n) = \{ \text{index}(X) \mid X : n \text{次元の滑らかなカラビ・ヤウ多様体} \},$$
$$l_{\text{term}}(n) = \{ \text{index}(X) \mid X : n \text{次元のターミナルなカラビ・ヤウ多様体} \},$$
$$\Phi_{\text{st}} = \{ 1 - 1/b \mid b \in \mathbb{Z}_{\geq 1} \}.$$

予想 (修士論文)

$$l_{\text{term}}(n) = l_{\text{kit}}(n-1, \Phi_{\text{st}}).$$

主定理

$$l_{\text{sm}}(n) \subseteq l_{\text{kit}}(n-1, \Phi_{\text{st}}) \subseteq l_{\text{term}}(n).$$

- ▶ 2つ目の包含は、予想の片方の包含が正しいことを示している。
- ▶ 1つ目の包含は、予想のもう一方の包含が部分的に正しいことを示している。

系

$l_{\text{sm}}(4)$: 有界。

主定理の1つ目の包含を証明するアイデア

- ▶ 次元 n に関する帰納法

X : n 次元の滑らかなカラビ・ヤウ多様体, $m = \text{index}(X)$ とする。
 $m \in l_{\text{kit}}(n-1, \Phi_{\text{st}})$ を示せばよい。

Beauville–Bogomolov分解

- ▶ X はエタール被覆 $\tilde{X} = \prod_i Y_i \rightarrow X$ により直積に分解する。
- ▶ Y_i : 厳密カラビ・ヤウ多様体, ハイパー・ケーラー多様体, またはアーベル多様体。
- ▶ 指数 m の自己同型 $g \in \text{Aut}(\tilde{X}/X)$ がとれる。

\tilde{X} の分解の成分が1つだけの場合

- ▶ g の \tilde{X} への作用は自由
 $\rightarrow \varphi(m) \leq 2n$ がわかる (φ : オイラー関数)
 \rightarrow 下の定理から $m \in l_{\text{kit}}(n-1, \Phi_{\text{st}})$ 。

\tilde{X} の分解の成分が2つ以上の場合

- ▶ $\tilde{X} = Y_1 \times Z$, $Z = \prod_{i \neq 1} Y_i$ とする。
- ▶ g も $g = g_1 \times g_Z$ と分解しているとしてよい (そうでない場合は容易)。
- ▶ g_1 が固定点を持つとき
 g_Z の作用が自由
 $\rightarrow Z/\langle g_Z \rangle$ に帰納法の仮定を用いて、 $m \in l_{\text{kit}}(n-1, \Phi_{\text{st}})$ が従う。
- ▶ g_1 が固定点を持たないとき
Holomorphic Lefschetz formula から、 $m_1 = \text{index}(g_1)$ が $\varphi(m_1) \leq 2n_1$ をみたす。
 \rightarrow 下の定理から $m \in l_{\text{kit}}(n-1, \Phi_{\text{st}})$ が従う。

定理

$$n \geq 3 \text{ に対し, } \{ m \in \mathbb{Z}_{\geq 1} \mid \varphi(m) \leq 2n \} \subseteq l_{\text{kit}}(n-1, \Phi_{\text{st}}).$$

証明のアイデア

- ▶ 次元 n に関する帰納法
- ▶ 重み付き射影空間を用いた具体的なカラビ・ヤウ対の構成
例えば、

$$(X, B) = \left(\mathbb{P}((m-1)^{(e-1)}, 1^{(m-1)}), \frac{m^e - 1}{m^e} H + \sum_{i=0}^{e-1} \frac{m^{i+1} - 1}{m^{i+1}} H_i \right),$$

$$H_i = \{x_i = 0\}, \quad H = \{x_0 + \dots + x_{e-2} + x_{e-1}^{m-1} + \dots + x_{e+m-3}^{m-1} = 0\}$$

は次元 $m+e-3$, 指数 m^e の KLT カラビ・ヤウ対。

今後の展望

- ▶ $l_{\text{term}}(n)$ に関する予想の証明 ($n \geq 4$)
- ▶ 指数予想の証明 ($n \geq 4$)
- ▶ B多重標準表現の有界性の証明 ($n \geq 3$)
- ▶ 集合 $l_{\text{sm}}(n)$, $l_{\text{term}}(n)$ の決定, その最大値の評価/決定 ($n \geq 4$)

- ▶ 指数予想, B多重標準表現を証明する大きな帰納法の枠組みを作る。
- ▶ $l_{\text{term}}(n)$ の最大値は予想されている [ETW22]。

参考文献

[ETW22] Louis Esser, Burt Totaro, and Chengxi Wang, *Calabi–Yau varieties of large index*, 2022, arXiv: 2209.04597v2.

[JL21] Chen Jiang and Haidong Liu, *Boundedness of log pluricanonical representations of log Calabi–Yau pairs in dimension 2*, *Algebra Number Theory* **15** (2021), no. 2, 545–567.

[Xu19] Yanning Xu, *Some results about the index conjecture for log Calabi–Yau pairs*, 2019, arXiv: 1905.00297v2.